東日薬会報

発　行　所　北海道石狩郡当別町金沢1757番地　☎(01332) 3-0301　直通・FAX
北海道医療大学薬学部同窓会　☎(01332) 3-1211　大学代表　発行人　田 中 稔 泰
印　刷　所　㈱廣済堂／札幌営業所　札幌市白石区菊水二条1　☎（011）842-5510

（写真提供：名誉薬草園長　故　縣功先生）

目　次

会長挨拶 ……2
「会員の皆様に感謝いたします」
山崎信彦前同窓会会長 …3
定年退職を迎えて　西部三省名誉教授 ……4
教授就任にあたって　島村佳一教授 ……5
石倉　稔教授 ……6
関崎春雄教授 ……7
第24回 北海道医療大学薬学部同窓会総会 ……8
茨城支部活動報告 ……10
支部長会議報告 ……11
医療薬学セミナー報告 ……11
新入会員 ……12～13
随筆　「タネの不思議（秋）」 ……14
「木の上の雪（冬）」 ……15
卒後研修のお知らせ ……16
編集後記 ……16

「会長就任のご挨拶」

北海道医療大学薬学部同窓会長
田　中　稔　泰

本年6月14日、北海道医療大学・サテライトキャンパスに於いて開催されました同窓会総会で山崎会長の後任に選任されました3期卒業の田中稔泰でございます。身に余る重責でありますが、各会員のご支援とご協力を得て同窓会の発展に微力ですがその任を全うしたいと存じますので、ご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

私と同窓会との関わりについてですが、私が本学を卒業した昭和55年に薬学部同窓会が設立され、薬学部の助手として勤務することになっておりましたことから、設立当初より期別幹事や理事、副会長等を勤めさせていただいておりました。初代会長は1期生の玉木氏、2代目が1期生の嘉陽氏、3代目が1期生の星野氏、4代目が2期生の山崎氏、そして私が5代目の会長となります。同窓会設立当初、どのような活動をすればよいのか判らず、まず同窓生の住所の把握を重点に名簿作成などの活動を行ってまいりました。その後の歴代会長のご努力や会員諸氏のご協力により、各地での支部が設立されるようになり、支部単位でのセミナーの開催や会員同士の交流等が行われております。現在の支部は、北海道では札幌、道北、十勝、道南、釧根の5支部、本州は青森、栃木、茨城、北越、沖縄の5支部で活動しており、今年度も2支部設立の予定となっており着実に且つ堅実に支部活動が全国で行われるようになってまいりました。

皆さんご承知のように、本大学は薬学部でスタートし、その後歯学部、歯学部附属歯科衛生士専門学校、札幌医療福祉専門学校、看護福祉学部の設立など医療関係の総合大学へと進展し、大学名称も東日本学園大学から北海道医療大学へと変更が行われるなど発展を遂げてまいりました。その大学も来年で創立30周年を迎える事となり、今後、同窓会としても、大学発展のために、学校教育の活性化の一翼を担うべく活動を積極的に行っていかなければならないと考えております。また、全国で薬剤師をはじめとして各分野で活躍されている卒業生を取り巻く社会環境は、厳しい情勢下になることが予想され、今後求められるものは、大学時代に培われた暖かい人間関係と友情および情報交換だと思います。この様な時こそ、同窓会の役割は大きく、各支部単位での活動が非常に重要になると思っております。従いまして、私の目標として既存支部の活性化と各地での支部設立に本部として重点を置き、今後の同窓会活動を活発にして、母校並びに同窓生の発展と飛躍に期したいと念願しておりますので、ご支援とご協力をお願い致します。

「会員の皆様に感謝いたします」

前北海道医療大学薬学部同窓会長
山　崎　信　彦

私が同窓会会長を終えて最初に思ったのは「会員の皆様に感謝」の気持ちです。私に薬学部同窓会会長を任せていただき有難うございましたという気持ちと「田中新会長はこの会を立派に運営していただける人で安心」という思いであります。本当に8年間有難うございました。同窓会の運営、大学法人との会合、他同窓会との話し合い、支部の設立など、私にとってかけがえの無い経験であり、私をより成長させていただいたと思っています。これからも副会長として我が同窓会の為に協力させていただきたいと思っています。ただ残念なことは在任中の私の仕事は不十分であり、あまり成果を上げられなかった事です。1つ目は会員への情報伝達の確立についてです。郵便による連絡は郵便料金の増加が予想されこれを改善するためにインターネットを利用した情報伝達方法の確立です。ホームページの作成とメールによる情報伝達です。最初のホームページは不慣れなので更新が大変で十分に機能しなかったように思います。今は改善され迅速に対応出来るようになりました。掲示板やメールによる情報伝達は計画半ばですがこれから解決できると思います。迅速で正確な情報が会員の皆様に届けられる事になると思います。2つ目は同窓会の活性化です。会員が3千名を超えるようになったので本部だけでは全国の会員のニーズに対応出来なくなっています。これを解決するために支部の設立、支部の活性化に活路を求めました。支部長を始め役員の皆様方の努力によって支部の活性化が出来たと思っています。ただ支部でも会員の把握に苦労しているように思えます。もっと支部の役員の皆さんに時間や経費などのご迷惑をかけないように出来ないかと検討中です。3つ目は薬局薬剤師の教育体制整備です。我が医療大にはあいの里のクリニックや当別の付属病院があります。病院やクリニックの前に同窓会が運営する調剤薬局を作りたいと思っています。卒業生の半分以上は調剤薬局の薬剤師になります。医療大には調剤薬局の薬剤師を教育するカリキュラムがありません。同窓会の薬局で薬局薬剤師教育のお手伝いが出来るのではないかと考えています。東京薬科大などは同窓会で薬局を持っています医療大の同窓生の薬局があってもいいのではと思っています。4つ目は同窓生子弟の入学です。医療大は私たちの大学です、私たちの大学に私たちの子供を入れるのはあたりまえのことと思います。大学は「卒業生の子弟に対して優先的なものは考えていない、大学のレベルが下がる」と言います、レベルが下がるとはどういう事でしょうか、私には理解できません。大学はだれに受験を呼びかけまのでしょうか、そのうち卒業生は子供たちの大学として医療大を選ばなくなると思います。なぜなら受験者人口が減ることや、薬学部の新設がこれから13校もあることです、北海道でも新設の手を上げているところがあります。このようなことにどう対応するのでしょうか？また国は医療費を抑える為の決定を次から次と出してきます、当然薬局にしわ寄せがきます、薬剤師の収入が下がります薬剤師に成ろうという人が減ります、この様な状況の中で学部運営が出来るのでしょうか、私は疑問です。5つ目は新卒者の就職管理です。多くの新卒者はインターネットなどを使って自分で就職先を探しています、大学は将来性とかこれから出てくる卒業生の為を考え積極的に就職先の斡旋に参加するべきです。受験生が大学を選ぶ時は「自分の実力にあった大学」と「将来何になれるか」です。これからは薬剤師が余ってくる時代です、よりよい就職先を大学として確保していないと受験生にとって魅力の無い大学に為ってしまいます、もっと戦略的に管理すべきです、今のままで本当によいのでしょうか？

私は色々なことを試みましたが殆どが中途半端です、これからは副会長として同窓会と大学の発展の為に努力したいと考えています。

定年退職を迎えて
―長い間ありがとうございました―

本学名誉教授 西 部 三 省

昭和50年8月末、弟の車に生活用品はもとより、これまで在職していた大学で行ってきた研究材料や抽出エキス、ガラス器具など一杯積み込んで、敦賀から新日本海フェリーで小樽に降り立った日から27年が過ぎ去りました。私も本年3月31日をもって平穏無事に北海道医療大学の定年を迎えることができました。

赴任当時しばらくは家族を名古屋に残しての単身で、どうなることかと心配でした。幸い前任の大学から久田末雄先生と羽賀正信先生もご一緒で大変心強い限りでした。

開学当時の専門課程の教員組織は木村康一先生を学部長に斎藤恒行先生、田辺恒義先生をはじめとする北大を定年後赴任された高名な年配の先生と30～40歳代の北大から本学に赴任された若手の先生からなっていました。この教員組織の先生方は当初の赴任予定とうかがっていたメンバーとはかなり入れ替わっていてびっくりしました。とくに北大からの若手の先生方は日本薬学会のみならず国際学会でも著名な先生方のお弟子さんばかりでした。これは大変だと思いました。なぜならば当時新設されたばかりの本学は薬学に関係した方々にすらどんな大学か知られていませんでした。まして一般の方々にはまったく知られていなかったと思います。そんな時何かの機会に学生が本学について尋ねられ、指導教授を聞かれた場合、著名な先生のお弟子さんならば、指導教授の先生を直接ご存知なくても、「北大の○○先生のお弟子さんの○○先生です」と答えるだけで「ああそうですか」と通じますが、そうでない私のような場合は「どこ出身の、なにをしている、どんな先生なの」とあれこれ尋ねられ、きっと困る場合があるに違いないと思ったからです。

本学の学生の為にもまず第一は少しでも全国の薬系大学の先生方および薬業界の方々に東日本学園大学(当時)としての私を知ってもらう必要があると痛切に感じました。それ以来、学会や学術雑誌にはいつも発表し、その存在を認めてもらうこと、また学会では多くの先生方とロビー外交、いろんな会合に顔を出すことも必要とそれなりの努力をしてきました。26年間余にわたりこれらを続けることが出来たのも教室員ならびに大学院生の方々の多大なる支援と協力のあった賜と感謝しています。

おかげで本年9月には、いままでの26年間余を振り返り「夢を追いかけて－研究の歩み－」という小冊子をまとめることができました。

本学を卒業したばかりのフレッシュマンが社会への門出にあたり毎年本学のアピールをしてくれているのも嬉しい限りです。本学は新卒薬剤師国家試験の合格率が毎年全国薬系大学中1～2番と高いことで全国に広く知られることになり、同窓生の皆様も自慢の一つと思います。私も薬剤師国家試験委員をしていた5年間（平成7年8月～平成12年3月）は厚生省（当時）での会議の際、いつも誰に言うこともできないまま一人で「よしやった」と興奮していました。

北海道医療大学といえば「国試合格率の高い大学」と知られるようになったからには、本学の先生方ならびにこれからの卒業生にもその名声をおとさないようがんばってほしいと願っています。同窓生の皆様も同じ思いではないかと思います。赴任当時と比べればすべてに隔世の感があります。

ただ一つ残念なことは、同窓会の発足にあたり世話役の1人であった塚本博樹君（1期生、故人）にあれこれとアドバイスした私にとって、同窓会の活動が発足後20年以上を経過しても、いまひとつパッとしないことです。

かって「東日薬会報」第5号（昭和63年9月1日発行）に「同窓会に思う」という一文を寄稿しましたが、その内容がそのまま現在でも通用してしまうことです。

その寄稿文の最後の部分をもう一度記しておきたいと思います。

「私は本学の同窓会が活発となるためには、まず母校に誰からも信頼され、リーダーシップのとれる優秀な卒業生が残っていること、本学出身を誇りとし、大学の発展を願う卒業生が多くいること、さらに地元出身者が多くなり地元の薬業界で広く活躍していることが必須ではないかと思います。そうでなければ同窓会は久しぶりに会った者同志が一杯飲むクラス会の域を出ないものに終ってしまうでしょう。今後の発展を期待しています。」

今後の同窓生の皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念しております。

長い間ありがとうございました。

（この原稿は2002年5月に寄稿していただきました）

「教授就任にあたって」

臨床薬理毒理学教室
島村　佳一

平成12年７月１日付けで近畿大学のライフサイエンス研究所から、北海道医療大学薬学部へ赴任して、はやくも２度目の春、３月を迎えました。この間、薬学部の緻密なカリキュラムによる講義、実習、試験、ハイテクリサーチ・シンポジウム、大学院研究科修士課程発表会など、北海道医療大学薬学部の教育と研究レベルの高さに感激いたしました。緻密なスケジュールに遅れるのではないかと内心ハラハラしながらの日々を過ごしております。

私は25年前に北大医学部を卒業後、当教室の前任の教授であられる齋藤秀哉先生（当時北大医学部第一薬理学講座教授）のもとで、大学院生として自律神経薬理学を学びました。「ネズミの体重はひとの百分の一しかないのに血圧は同じです」と齋藤先生から教えていただいて以来、東京都老人総合研究所、近畿大学高血圧研究所、近畿大学ライフサイエンス研究所と、高血圧症や自律神経の支配を受けている内臓の機能調節についての研究をつづけてきました。交感神経活動の調節機能や、平滑筋の膜電位や活動電位と平滑筋の機能との関係を検討しておりましたが、現在は、消化管や血管など平滑筋臓器の機能に対する薬物効果について調べています。電気生理学的実験では、神経や筋など、生体の電気的活動をオシロスコープで即時に観察できるので、薬物などへの反応を観察して成功するとその場面場面が目に焼き付いて感動が忘れられません。こちらに赴任して次第に実験室も整い、摘出臓器をもちいた実験を中心として、単離細胞や麻酔動物の実験もできるようになりました。成功より失敗の方がはるかに多い実験ですが、困難なほどあきらめずに、今日まで研究をつづけています。ネバー・ギブアップです。

薬学部で担当している講義は、臨床医学概論では病気の特徴を、臨床生化学では各疾患と臨床検査値との関係、臨床薬理学では内分泌、抗生剤、抗がん剤の薬理学を、毒理学では医薬品開発関係と薬物毒性を教えています。いずれも日進月歩の領域ですので、新しい内容をどんどん取り入れています。内容が豊富なので基本的な重要な事項は一貫性をもたせて講義間で繰り返すように配慮していますが、まだまだ改善の余地がありそうです。

私がこれまで多くの先生方から教えていただいたこと、時間をかけて学んだことを、学生に伝えたいと思っておりますが、むしろ反対に学生から学ぶことも多いと思います。以前に勤務していた大学にくらべると、北海道医療大学薬学部では、随分大勢の学生が研究室に質問に来ています。参考書がありますので、一緒に調べて考えてもらうことにしています。研究にも講義の準備にも学生の新鮮な視点と若い活力の重要性を感じています。臨床医学では「患者さんが先生です」と教えられますが、教員には学生、薬剤師には患者との関わりを通じて学ぶことが多いと思います。

医学部では、「正常を知らなければ異常を理解できない」と、生体の正常な構造と機能について膨大な量の学習をします。臨床では「医者は、患者の人物ではなく、患者の病気をみなくてはいけない」といいますが、一方では人格が立派で成熟した患者と向き合うためには、医療従事者の人格形成も必要です。医療薬学教育ではこれらのことも念頭におかなくてはいけないのだと、身をひきしめております。

（この原稿は2002年３月に寄稿していただきました）

「教授就任にあたって」

医薬化学教室
石倉　稔

平成14年4月1日付にて医薬化学講座教授の辞令を拝受いたしました。右往左往の毎日が続く中、瞬く間の1年と数ケ月が経過いたしました。この間、皆様からいただきました叱咤激励に改めてお礼申し上げます。

昭和56年4月に本学（当時、東日本学園大学）薬学部助手として奉職いたしましてから、20年余が経過し、この間の本学および大学を取り巻く状況の変化の大きさには驚くばかりです。北海道医療大学へと校名変更を行うとともに、薬学、歯学部に看護福祉および心理科学部を加えて4学部体制となり、医療系総合大学としての一層の充実がはかられたこと。また、薬学部においても総合薬学科の1学科制とともに150名への定員増がなされ、国家試験成績においても常に合格率上位を保つなど益々の充実がなされてきました。しかし、これから薬学教育6年生への移行、これに伴う6ケ月病院実習体制の確保、他大学での薬学部新設の増加など薬学を取り巻く環境はさらに厳しくなり淘汰の時代を迎えることが予想されます。この中で、充実した教育、研究体制を築き本学薬学部が発展を迎えることができるよう、微力ながら尽力できることを願っています。

AO入試、地域特別推薦、編入学生の受け入れなど新しい入試制度の導入があり、勉強に対して真摯な学生が増えてきました。しかしながら、化学が全くできない、生物を全く知らないなど学力の格差にも大きな変化を感じるとともに不安を覚えます。「クスリ」は単に化学物質であるだけでなく生命現象および日常の生活とも密接な関連を保つことから、薬学の学問分野の間口は広く化学、物理学、数学、生物学、薬理学、人文科学などが有機的に繋がった総合的学問となっています。このため、薬学部での講義は多岐にわたるとともに内容も深いものとなっていますが、特に1、2年生での基礎科目が薬剤師としての基礎的素養を形成するうえで重要であることを理解してもらいたいと願っています。

私自身は有機化学を専門とすることから考え方に偏りがでてしまいますが、化学物質としての「クスリ」の物性、化学反応性における理解を基盤として、生体内挙動、生体との相互作用を化学的にとらえる観点が重要だと考えています。先ず、純粋に化学構造式に親しんで欲しい、その化学変化の面白さを分かって欲しいと同時に生命現象とクスリ（化学物質）との相互作用の不思議さを感じて欲しいと願っています。有機化学は勉強が面倒くさい、有機溶媒臭いなどと嫌われてしまいますが、有機化合物の化学変化について体系的に理解する基礎力は薬学出身者として大切なものであると信じています。

医薬品開発において、ある活性発現を期待される化合物（モノ）について薬理活性試験を行うこととなりますが、このモノ創りの方法（合成法）の開発が有機合成化学の大きな課題となります（この内容はなかなか一般には受け入れてもらえないのが残念です）。私は、有用なモノ創りの方法（合成反応）の開発を基盤とする生理活性化合物の合成を主たる研究テーマとして、複素環化合物、核酸関連化合物の合成と生物活性について検討を続けています。最近、この分野へも理学部、工学部関係からの参画が増えていますが、生理活性化合物の合成のみならずその生物化学的意義についても理解できる基礎教育を基盤とする薬学の有機化学は、他学部の有機化学とは差別化できるものと考えています。

これまでに数多くの本学卒業生が本会員として社会で活躍しており、これからも卒業生が新しく本会会員として加わり社会で活躍の場を見出すこととなります。本会の益々のご発展と会員皆様のご健勝を祈念いたします。

「教授就任にあたって」

生薬学教室
関崎　春雄

平成15年４月１日付けで薬学部教授を拝命し、３ヶ月が過ぎようとしています。生薬学教室は昭和50年に久田末雄、西部三省両先生により創設されて以来数多くの学部学生、大学院生を輩出してきた伝統ある教室です。如何にしたら同窓生の方々に有用な情報を発信できるか、また、如何にしたら同窓生の皆さんが出入りしやすい教室にすることできるか熟慮しているところです。

私は昭和49年４月に本学が音別に教養部をスタートさせた時に薬用植物学教室の助手として赴任し、１期生から５期生までの同窓生には薬用植物学の顕微鏡実習と人工池の周りでの植物採集を指導しました。特に夏休み中の帰省先での採集植物のさく葉標本提出で人参、大根などの野菜ばかりの学生がいたことを思い出しています。それと教職員チームと色々なスポーツの試合をしたことも思い出されます。その後昭和55年から昭和57年までの２年間はハーバード大学の岸義人教授のもとに留学する機会に恵まれ、その時の体験がその後の教育、研究の大きな糧となっています。帰国後の昭和57年秋に当別校舎の薬品物理化学教室に配置転換になって以来、薬品物理化学教室で助手、講師、助教授と今年の春まで過ごしました。多くの同窓生の方々は物化の先生とのイメージが強いかもしれません。物化と生薬は研究室も隣、私も隣の部屋に移った気分でおりますし、同窓生の皆さんとは在学中に多くの接点があった訳で、この点、少し気持ちを楽にしています。

時の速い流れのなかでそれぞれの立場で、自分が辿ってきた道で多くの先生の一言が心の支えとなって今までやってきました。皆さんも同じではないかと思います。私が大学院に入った頃は、有機化学全盛時代で有機化学で何事も解明できるような勢いがありました。新しい化合物を検索し、創る魅力は今も変りないと思いますが、医薬品の創製をはじめ化学の中心が有機化学工業にあったと思います。そのような時世に生物有機化学ともいえる、生物発光物質の検索、単離、合成、あるいはフグ毒テトロドトキシンの合成などの手伝いをする機会に恵まれ、それらの完成を垣間見ることができました。先生の「人間粘れば成し遂げられる」の一言が昨日のことのように思いだされます。音別では木村初代薬学部長のご指導で薬用植物の栽培のお手伝いをさせていただきましたが、「薬用資源を天然に頼っていたら枯渇する。広い北海道で栽培せよ」の一言が、マオウ、甘草などでご存知のとおり現実の問題となっています。先生の鋭い洞察力に敬服するとともにこれからの研究の一方向と思っています。薬品物理化学教室でのここ10年は、化学から生物、生物からゲノム科学へと目まぐるしく変貌した時です。このような時、私達も時代の流れにのって谷澤先生を中心に酵素を触媒としたペプチド合成の研究を展開してきました。様々な酵素を触媒に使用しているうちに天然には私達が必要とするもっと優れた酵素が存在するはず、天然資源の枯渇化を考えたとき、有効利用されていない部分あるいは魚類の内蔵などの廃棄されていた部分にも私達が求めている物はあると信じて研究を進めてきました。その結果、シロサケの内蔵から有用な酵素が単離でき、X線結晶構造解析でタンパク質であるシロサケトリプシンの構造を明らかとすることに成功しました。これは1999年からスタートしたポストゲノム計画のタンパク質の構造決定を進めるものと一致する研究となっています。教室員全員の粘りで成し遂げられたものと思っています。

生薬学教室でも今までに培ってきたことをベースに北海道の天然資源の有効利用を念頭に、創薬のシード検索に頑張っています。これからもどんどん優秀な後輩達を輩出いたします。ご指導の程、よろしくお願いいたします。

最後に、会員の皆さんのますますのご発展とご健勝をご祈願申しあげ、ご挨拶とさせていただきます。

第24回 北海道医療大学薬学部同窓会総会

平成15年6月14日（土）北海道医療大学サテライトキャンパスに於いて第24回総会が開催されました。以下にその内容をご報告致します。会員の皆様には一層のご理解をいただき、同窓会活動にご協力いただきたくお願い申し上げます。

平成14年度事業報告

平成14年4月1日から平成15年3月31日まで

1．理事会の開催（4月13日）
審議内容
1）総会開催準備
2）活動予定、方針について
3）その他

2．第23回北医療薬総会の開催（5月18日）

3．講演会の開催
1）医療薬学セミナー（各支部と協力）
5月18日　札　幌（札幌支部）
6月22日　水　戸（茨城支部）
9月7日　宇都宮（栃木支部）
9月7日　青　森（青森支部）
9月15日　小　松（北越支部）
10月5日　旭　川（道北支部）
10月13日　那　覇（沖縄支部）
11月9日　釧　路（釧根支部）
11月15日　函　館（道南支部）
2）第16回医療薬学公開講座
札幌10月5日
3）第3回薬剤師リフレッシュスクール
10月27日、11月2日、9日、17日

4．役員会の開催（11月13日）

5．支部長会議の開催（11月23日）

6．本学他同窓会との懇談会（11月29日）

7．卒業生への入会案内（2月）

訃報

佃　俊男氏（1期卒）　平成15年7月30日
神永　英俊氏（16期卒）　平成15年8月29日

謹んでご冥福をお祈りいたします。

平成15年度事業計画

平成15年４月１日から平成16年３月31日まで

主な事業計画

１．理事会の開催随時開催（第１回：５月17日）
　審議内容
　　１）総会開催準備
　　２）支部長会議開催準備
　　３）その他
２．第24回北医療薬総会の開催（６月14日）
３．講演会の開催
　１）医療薬学セミナー（各支部と協力）
　　６月14日　札　幌（札幌支部）
　　７月５日　水　戸（茨木支部）
　　10月４日　名　寄（道北支部）
　　10月25日　宇都宮（栃木支部）
　　その他日程調整中
　２）第17回医療薬学公開講座
　　札幌10月25日
　３）第４回薬剤師リフレッシュスクールへの後援
　　９月21日、10月５日、19日、26日
４．役員会の開催
　随時開催（第１回：４月21日）
５．会報の発行（第19号）
６．本学他同窓会との懇談会

薬学部同窓会新役員

（平成15年５月から平成17年５月まで）

役　職	氏　名	卒期
会　長	田中　稔泰	３期（昇任）
副会長	山崎　信彦	２期
	遠藤　　泰	４期
	多田　正人	４期
	福田　修司	５期
	浜上　尚也	９期
理　事	星野　太郎	１期
	馬原礼二郎	４期
	嶋　　唯男	６期
	桂　　正俊	12期（新）
	村井　　毅	13期
	齋藤　　剛	13期
	富樫真実子	14期
	飛山　　毅	15期
	木村　真一	15期
	寺戸　睦子	16期
	小名木　仁	17期
監　査	木村　　治	17期（新）
	山下　美紀	18期

支部設立のお知らせ

今年度より神奈川支部が設立されます。

下記の日程で設立総会と医療薬学セミナーが開催されますので、神奈川在住の会員の皆様は、是非ご出席ください。

日時：平成15年11月15日（土）　18：00～22：00
場所：ヨコハマインターコンチネンタルホテル
　　横浜市西区みなとみらい１－１－１
　　TEL. 045-223-2222

医療薬学セミナー講師
　本学名誉教授、札幌医療福祉専門学校校長
　　高田　昌彦先生

詳しいお問い合わせは、神奈川支部事務担当山口　秀樹（９期）まで。
電話：046-826-2350（関口調剤薬局内）
E-mail：yamacell@jcom.home.ne.jp

なお、電話でのお問い合わせは17：00～18：00にお願いいたします。

茨城支部活動報告

伊東　正広（20期卒）

茨城支部は、2001年11月11日に設立し51名の卒業生で構成され、大学より先生をお招きして開催される医療薬学セミナーを中心に年3回の総会を行いながら運営を行っております。セミナーはこれまでに3回開催されており、1回目（2001. 10. 13）は西部三省先生（本学薬学部名誉教授）に「生薬のポリフェノールとガンの予防」と題し、2回目（2002. 6. 22）は高田昌彦先生（本学薬学部名誉教授）に「変貌する医療と薬剤師業務の将来展望」と題しご講演いただきました。両先生方も、私達にわかり易くご講演くださり、出席者一同、感謝しております。

去る2003年7月5日㈯には、水戸京成ホテルにて3回目となる医療薬学セミナーを開催いたしましたのでご報告申し上げます。三回目となる今回は堀田清先生（本学薬学部助教授・前薬用植物園園長）にお越し頂き、「食物は薬～食と健康を考える」と題してご講演頂きました。今回のセミナーも前回と同様、オープン講座の形式をとり、本学の卒業生以外の薬剤師や健康に関心の高い一般の方の参加がありました。このセミナーの開催についての情報は茨城県の地方紙等に掲載されたこともあり、卒業生以外10名の出席を含む28名で行われました。一般の方の参加があったことで、若干緊張した雰囲気の中で講演は始まったように感じました。

講演内容は、病気にならないように未病の状態を保つ為に「食べる」ことがいかに大切であるかを、色々な食物主要成分について薬学的見地からお話頂きました。また、活性酸素の発生するメカニズムと抗酸化物質を多く含む食品とその食べ方についてもお話頂きました。参加者の熱心にメモを取る姿、頷く仕草を見て、セミナーを開催する

意義を実感いたしました。

講演の最後には、我が母校「医療大」の最近の様子を見せて頂きました。これには、参加者一同、懐かしさのあまりため息が漏れ、和やかな雰囲気に変わりました。一般参加の聴講者の方には自然溢れる医療大の様子がさぞ羨ましく映ったことと思います。そして、一同を驚かせたのは、薬用植物園の裏山に散策路が完成したことです。散策路の周りには貴重な北の植物がたくさん自生している様子が見て取れました。この散策路の完成に携わった、堀田先生を始め関係者の皆様におかれましては大変なご苦労があったと思います。公演後の懇親会では、公演の内容、学生時代の思い出話、最近の薬学教育、薬草園裏山の散策路についてなど、話題に事欠かない楽しい酒席となりました。

また、懇親会の席で卒業生を対象とした薬草園散策ツアーの企画が持ち上がりました。茨城支部西野支部長（本学一期卒　㈲西野自然堂薬局代表取締役）が中心となり、実現に向け各支部に呼びかけを行っております。2004年春の開催を目標に調整してまいります。

このように、茨城支部では医療薬学セミナーを中心に、より一層活動内容を充実させたいと考えております。そのためにも、セミナー等の参加者が増えるように、積極的にアピールしていくことや、近県の支部で開催されるセミナー等にも是非参加させていただき、支部同士の関係も深めてまいりたいと考えております。

最後になりますが、遠路、茨城まで足をお運びいただき、ご講演くださいました、堀田清先生に心から感謝いたします。今回に懲りず、またお会いできる日を茨城支部一同お待ちしております。

支部長会議報告

日　時　平成14年　11月23日（土）15時より

場　所　本学サテライトキャンパス

出席者　本部　会　　長　山崎　信彦（2期）
副　会　長　遠藤　　泰（4期）
副　会　長　福田　修司（5期）
副　会　長　浜上　尚也（9期）
理　　事　星野　太郎（1期）
理　　事　木村　真一（15期）
（議事録記録人）
札幌支部長　多田　正人（4期）
道北支部長　畑中　　勝（3期）
十勝支部長　中村　　章（1期）
道南支部長　小林　隆宏（8期）
釧根支部長　高橋　　貢（3期）
青森支部長　三上　　章（1期）
茨城支部長　西野　郁郎（1期）
栃木支部長　川北　恵一（1期）
北陸支部長　杉本　雅規（3期）
沖縄支部長代理　内原　久子（18期）

議　題

1．各支部長によって支部の活動の報告がなされた。各支部とも他の支部が、いかにして参加者、特に若い会員の支部活動への参加を呼び掛けてるかに興味があるようで、活発な意見交換がおこなわれた。

2．支部の援助費について
1律5万円　要報告書の確認

3．新支部の設立について
支部の区割り（各県1支部など）新支部の設立方法、設立時の予算などの確認

4．医療薬学セミナー（H15年、16年）について
1）本学の職員（教授、助教授、講師など）が以前と変わっているため、セミナーを行う講師のリストや研究内容を本部から各支部へ送ることで決定した。
2）他の学部の同窓会各支部とのセミナーの共同開催など他学部との交流を活発にしたいとの意見が多かった．そのため他の学部の同窓会会長、各支部長の名前をリストアップすることになった。

5．寄付金の徴収について
法的なものをクリアすることが重要であるが、次年度から寄付金を徴収する方向で意見が一致した。

6．会費未納者について
同窓会会費の未納者と会費納入者と間で、現在のところは差別化をしないことで決定した。

7．同窓会ホームページについて
現在はホームページの作成などは大学院生に依頼していたが卒業してしまうと管理ができなくなるので、事務に依頼し、各支部からのホームページの更新などは大学事務を経由することとした。

8．会報について
ホームページが充実すれば将来的に会報を廃止する方向で意見が一致した。

9．薬剤師支援システム
緊急時（災害など）一時的に薬剤師が不足した際に大学院生などを派遣できないかなどの意見が出された。

医療薬学セミナー報告

札幌支部長　多田　正人（4期卒）

平成15年6月14日（土）に本学サテライトキャンパスにおいて、薬学部同窓会主催による医療薬学セミナーが開催されました。

札幌開催の医療薬学セミナーは、毎年、薬学部同窓会本部・札幌支部の総会開催に合わせて開催されており、同窓生以外に一般の方も参加できるようになっており、当日は、55名（一般の方も含む）が参加されました。

今回のセミナーは、本学薬学部助教授の小林道也先生に「プレアボイド：患者リスク回避に着目した新しい薬剤師職能」について講演していただきました。

プレアボイドという言葉は知っていても、本来の目的や実際にどのような取り組みが行われているのかわからないことが多くありました。講演では、プレアボイドとはどのようなものか、また報告事例と統計結果、今後の報告制度の展開についてお話しいただき、患者さんのリスク回避のために重要な役割を持っていることを改めて認識させられたような気がします。薬剤師が、患者さんの副作用などのリスク回避にいかに取り組むかが、これからのファーマシューティカルケアの実践で活かされ、さらに薬剤師の職能を広げていかなければいけないことを実感しました。

紙面をお借りしまして、お忙しい中講演をお引き受け頂きました小林助教授にお礼申し上げます。

随　筆　「タネの不思議（秋）」

縣　　功

秋になると薬草園の薬草等もタネをつけはじめる。ヨーロッパのクロガラシも1.5米くらいの高さになり長角果の中にびっしりと沢山のタネをつける。その頃薬草園の薬草等に次の世代に向けて種々なタネを考え出し、自分等の種（シュ）を残そうとする。わた毛でとぶタネ、ハネのついたタネ、動物の体につきやすいタネ……等々である。森林の下草のカタクリは森林の葉が出揃い日射しがさいぎられる頃にタネを作ってしまう。秋という季節ではないがカタクリにとってそのときが秋の実りの季節なのであろう。カタクリがタネを地面におとすと、どこからともなくアリがやってきて巣の近くまで持ってゆく、カタクリのタネのある部分に特種な脂肪酸を大量に含んでいる場所があり、その部分を「油部分」という意味でエライオゾームと呼んでいるが、この部分こそアリの好きな部分なのである。この部分を巣に入れ他の部分（発芽できる部分）を巣のまわりに放置する。カタクリは前の位置とは異なる地点（アリの巣の近く）に新しい自分の種（シュ）を移動させることができるのである。このようにしてカタクリはだんだんと自分の種（シュ）の自生地を広げてゆくのである。

小さな小さな茶色のタネがばらまかれた香ばしい香りと歯ざわりの良いパンを皆々人は食べたことがあると思う。これはケシのタネを煎ったものである。ケシの果実に１ミリくらいの傷をつけ(そのときけしてタネにさわってはいけない）そこから出る液汁を集めたものがアヘンである。アヘンは薬の古文書、エーベルス・パピルスに“子供の泣き過ぎをふせぐ治療薬”としてのっている。現在でも世界の最も素晴らしい鎮痛剤である。しかしアヘンの中の活性成分が何であるかと言う答えは長い間、分からなかったが、それを明らかにしたのは20才の若者であり、16才のときからバデルボルンの薬剤師のところに年期奉行に出ていたフリードリッヒ・ウイルヘルム・アダム・ゼルチェネルという人である。その成分はモルヒネと名付けられた。この発見は世界最始の薬草からの有効成分の単離である。ゼルチェネルは60数回の実験を繰返し、この発見をしたという。皆さんの仲間の薬剤師がこのような世界的な大発見をしたのである。そしてタネの不思議にケシのタネには麻薬成分が含まれていないことである。しかしこのタネから育つケシには麻薬成分が含まれている。どうなっているのかと首をかしげる。

暑い夏の日、涼しいワイシャツとか、服とかを着ておられた人がいると思う。それはアサの繊維で作られている。アサの繊維は4000年前すでに人類の衣服として使用されている。アサの別名はタイマ（大麻）であり、その茎葉や樹脂には幻覚物質が入っており、マリファナ、ハシュツシュなどと言って使用が法律で禁止されている。しかしアサのタネを含む果実には幻覚物質は入っておらず、東洋医学の方で麻子仁（マシニン）と言い、通便、滋養、鎮咳などの作用があるので便秘に利用され特に老人など便が乾くような便秘に用いられ、麻子仁丸の成分となっている。また驚かれると思うが、七味唐辛子の中に入っている。

薬草園の薬草はほとんど枯れているのに、１マスだけが美しい10cmくらいの淡赤の花が地面から多数顔を出している。秋の終りにふさわしい寂しげなイヌサフランの花である。

柴田翔という作家が次のようなことを書いている。それはゲーテの「親和力」の言葉からというが「人間のさまざまな生の季節は、それぞれの希望、展望を持つ。だが人間が人間である限り、その希望、展望が完全に満たされなかった希望、展望に固執することは、その後の人生を硬直させ、生の伸びやかさを失わさせる」だから「過去に固執さえしなければ、私たちにはいつも新しい視野が開けてくる」と言っている。学生時代という季節、青年時代という季節、中年時代という季節、老年時代という季節……等々、その人、一人一人にそれぞれの季節がある。例えば学生時代という季節に実現できなかったことを、老年時代に実現させてみてもそれは学生時代の幻影を見るようなもので、そのようなことはするもんではない。その人生の季節、季節の中で考え、悩み、努力して、今生きている季節は前の季節のしがらみをぬぎすて、全く新しい気持で今の季節を努力することこそ、大切だということのようだ。

秋の七草の１つフジバカマが淡紅紫色の小さな花を咲かせる。この頃この花の近くの茎を手折るとそのときは香りがないがしばらくするとほのかな甘い香りがただよう。それを中国の女性はかみ飾りにしたり、香り袋の中に入れて持ち歩くという。この草も濫獲されて少なくなっている。寒い北風が吹いてきてフジバカマをゆらしてゆく。

随　筆　「木の上の雪（冬）」

縣　　功

10月ま終り、ほとんどの薬草は枯れてシオンの紫色のキクの花が深秋を彩っている。渡辺さんや宮本さん等は来春にむけて枯草を始末したり、木の冬囲いをしたりと何かと忙しい毎日である。11月の声を聞くと薬草園は白銀の世界となる。

樹について書こうと思って種々の本を見たが樹がどんなに大切かということの推論はあるが、実際の事例はなかなかない。そんなおりふとしたことで手に取った内村鑑三著（岩波文庫）の「デンマルク国の話」を読んで驚いた。それは私が望んでいた樹が如何に大切かの実例がその内容であったからである。種々な本を読んでそれらの内容をまとめようと思ったが、この本の出現でそれをとりやめ、この本の内容のエッセンスを書くことにした。そして樹の大切さをフィクションでなくノンフィクションで肌で感じてもらいたいからである。「デンマルク国の話」というのはデンマークの国の話しなのである。デンマークはアンデルセンの故郷であり北欧の入口の国である。

この話しは日本人も経験した敗戦という泥沼からデンマークの人がどのようにして、現在繁栄しているデンマークをささえている緑を育てたかという話である。デンマークは1864年にドイツとオーストリアと戦い、敗れて南部最良の2州シュレスウイヒとホルスタインを割譲した。残ったのは

北海道の半分しかない国土であった。しかもその国土の半分以上がユトランド（Jutland）という荒漠とした土地であった。しかしもともと不毛の土地ではなく西暦1000年頃は繁茂した良き森であった。1600年頃になると樫の林がちょこちょこあるくらいになり文明が進につれ木はなくなりついに不毛の地になってしまった。戦いに敗れ友が絶望に圧せられている中1人の工兵士官ダルガス（Enrico Mylius Daglas）36才はデンマークを蘇がえらせようと心に決めていた。彼は戦いに臨み、橋を架し、道路を築き、溝を堀りながら故国の地質を研究していた。ユトランドに森を作ろうと考えていたのである。彼はただちにユトランドの緑化にかかり、溝を堀って水を注ぎ、荒野の草を駆逐して、イモと牧草を植えたが、樹を植えることには失敗した。そして研究をくり返して、ノールウェイ産の大モミ（ドイツトウヒ（Picea abies Karst））を見つけ、それを植えてみたが数年ならずして枯れてしまった。ダルガスはひるまず研究を続けアルプスのハイマツに似たほふく性の小モミ（モンタナマツ（Pinus montana Mill））を大モミのそばに植えてみた。奇みょうなことに両種のモミは共に成長し、年を経ても枯れなかった。そしてユトランドの荒地に始めて緑の野ができた。しかし両種のモミはある程度成長するとその成長は止まってしまった。それを解決したのがダルガスの長男、植物学者のフレデリック・ダルガスである。若いダルガスはある程度大きくなった大モミのそばの小モミを切ってみた。そうすると大モミは大きく成長した。そしてユトランドは緑の森と生まれ変った。1860年に於てユトランドの山林は、わずか15万7000エーカーにしか過ぎなかったが1907年には47万6000エーカーにまでなった。そしてユトランドはイモ、黒麦その他少数の産物しか採れなかったが森ができてから農業は一変し、小麦、砂糖大根、穀類それにほとんどの野菜を育てることができるようになり木材を与えられたうえに気候まで変ったのである。霜は消え、砂は去り、洪水の害はのぞかれ、砂地に田園ができ、果園ができた。それによりゆたかな農業、牧畜ができるようになり牡牛を育て、バターやチーズを生産し、それを育てる森があり今やデンマークの富はこの土地に依存しているといっても過言ではない。これが1人の男の努力と情熱によってできた。どうか原著を見ていただきたい。そして樹が如何に人間と深くかかわっているかを知ってほしい。

卒後研修のお知らせ

9月以降に行なわれる医療薬学セミナーをご案内致します。
各セミナー終了後には懇親会も開催されます。講師の先生や同窓生と意見交換することのできる良い機会ですので、是非ご参加下さい。

日本薬剤師研修センター認定研修（1単位）

開催地	開講日時	講演会場	演題 講演内容	講師
長岡	9月14日（日） 15：00〜17：00	ホテルニューオータニ長岡 新潟市長岡市台町2−8−35	**元気になる野菜の店** 病気になってからではなく病気にならないためのアイテム。それは食べ物です。色々な食べ物の中から野菜に焦点を宛て、成分効能などなど、元気になるお話をします。	堀田　清 （本学薬学部助教授）
名寄	10月4日（土） 17：00〜18：30	名寄温泉サンピラー 名寄市日進	**ファーマシューティカルケアとエビデンス** 薬物療法の向上のために、エビデンスを活用した医薬品の有効性、安全性の評価について、具体的な症例をもとに考えてみましょう。	阪田久美子 （本学薬学部講師・歯学部附属病院薬剤部長）
宇都宮	10月25日（土） 18：00〜20：00	ホテル東日本宇都宮 宇都宮市上大曽町492−1	**固体分散体の製剤への応用** 固体分散体の物理化学的性質および生物学的利用能について述べる。	関川　彬 （本学薬学部教授）
沖縄	11月8日（土） 19：00〜21：00	ホテル西武オリオン 那覇市安里1−2−21	**個体差健康科学と薬物療法　〜最近の研究成果から〜** 遺伝子解析の進展に伴い遺伝子変異は種々の疾病に関与している事が明らかになってきました。遺伝子変異解析法と一塩基多型についてお話します。	渡部　博之 （本学薬学部教授）
釧路	11月15日（土） 17：30〜19：30	釧路プリンスホテル 釧路市幸町7−1	**薬物による悪心・嘔吐と制吐薬** 医薬品とくに制熱剤の副作用として発現する悪心・嘔吐と制吐薬の作用点を解説します。	遠藤　泰 （本学医療科学センター助教授）
横浜	11月15日（土） 18：00〜20：00	ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル 横浜市西区みなとみらい1−1−1	**薬剤師職能の現状と将来の課題** 生命科学研究の進歩による技術革新と社会構造改革が進むなかで薬剤師職能の現状を考察し将来の課題を展望します。	高田　昌彦 （札幌医療福祉専門学校長）

■講師略歴

堀田　清●ほりた　きよし：1958年生まれ。本学薬学部卒業。北海道大学薬学研究科博士課程修了。同大学薬学部助手を経て、95年より本学薬学部助教授。薬用植物園園長歴任。専門は天然物有機化学。薬学博士。

阪田久美子●さかた　くみこ：1939年生まれ。北海道大学医学部薬学科卒業。札幌医科大学助手を経て、78年本学歯学部附属病院薬剤部勤務。95年より同薬学部講師・同歯学部附属病院薬剤部長兼務。専門は医薬品情報学。医学博士。

関川　彬●せきかわ　ひとし：1947年生まれ。北海道大学薬学部卒業。同大学薬学部助手を経て、79年本学薬学部助教授。96年より同教授。専門は薬剤学。医学博士。

渡部　博之●わたなべ　ひろゆき：1941年生まれ。北海道大学医学部薬学科卒業。北海道大学医学部附属病院薬剤師（技官）、医学部助手、米国ピッツバーグ大学及びカリフォルニア大学サンディエゴ研究員を経て、76年本学薬学部講師、78年助教授、81年より同教授。専門は生化学。医学博士。日本生化学会評議員。所属学会：日本生化学会、日本薬学会、日本癌学会。

遠藤　泰●えんどう　とおる：1958年生まれ。本学薬学部卒業。同大学院薬学研究科修士課程修了。国立札幌南病院勤務後、87年より本学薬学部助手。96年より同講師。02年より本学医療科学センター助教授。03年より本学医科歯科クリニック薬局長兼務。専門は薬理学。薬学博士。日本薬理学会学術評議員。日本トキシコロジー学会評議員。日本臨床薬理学会認定薬剤師。

高田　昌彦●たかだ　まさひこ：1931年生まれ。北海道大学医学部薬学科卒業。北海道大学医学部附属病院薬剤部、厚生省北海道地方医務局勤務を経て、78年より本学薬学部教授。98年札幌医療福祉専門学校長、本学名誉教授。専門は薬剤学、社会薬学、薬学博士。

なお、9月以前には下記の2つの講座が開講されました。

札幌	6月14日（土） 18：00〜20：00	サテライトキャンパス 札幌市中央区北4条西6丁目 毎日札幌会館6階	**プレアボイド：患者リスク回避に着目した新しい薬剤師職能** 医療ミスに限らず、医薬品の副作用など患者が抱える数多くのリスクを、薬剤師はいかに回避することができるか、考えてみたい。	小林　道也 （本学薬学部助教授）
水戸	7月5日（土） 18：00〜19：30	水戸京成ホテル 水戸市三の丸1−4−73	**食と健康を考える** 私たちが毎日食べている食べ物の中には病気を予防するアイテムが満載です。スパイス、野菜、鍋、活性酸素のお話まで丸ごとお話します。	堀田　清 （本学薬学部助教授）

■講師略歴

小林　道也●こばやし　みちや：1964年生まれ。北海道大学薬学部薬学科卒業、同大学院薬学研究科修士課程修了。北海道大学医学部附属病院薬剤部勤務を経て、01年より本学薬学部助教授。専門は生物薬剤学。98年より日本病院薬剤師会医薬情報委員会医院。薬学博士。

編集後記

みなさん、お元気でお過ごしでしょうか？北海道は昨年、一昨年に引き続いて寒い夏となりました。今年は、全国的に冷夏のようですね。ここ当別では薬学部中庭のナナカマドの木が、赤い実をつけ、葉が色づきはじめております。夏を感じることなく秋が訪れてきたようです。日本列島を縦断した台風10号は全国各地に大きな傷跡を残していきましたが、冷夏の影響なのでしょうかこの台風はこの時期には珍しく北海道を直撃しました。台風10号による記録的な大雨は日高、十勝地方に甚大な被害をもたらしております。被災地の皆様には心よりお見舞い申し上げます。

さて、大変遅くなりましたが会報19号をお送りいたします。私の怠慢により昨年の発行が滞り、2年ぶりの発行となりました。西部先生、島村先生にはお忙しい中、貴重な時間を使って原稿を執筆していただいたのにも関わらず1年もの間私の手元に原稿をお預かりすることになってしまい、弁解の余地もございません。この場をお借りいたしまして深くお詫び申し上げますと共に、今後も折に触れて寄稿いただけますようお願い申し上げます。

故　縣功先生から寄稿いただいていました薬草園の四季を題材にした随筆は今回の会報で完結しました。折しも、会報の編集作業をしているときに、北海道新聞のコラム（卓上四季）の「雑草のごとく生きる」（8月13日）という記事を目にし、種を保存するための雑草のしたたかさに感心させられました。縣先生の随筆「タネの不思議」でも植物が種を保存するしくみの巧みさについて取り上げられていましたが、何とか先行きが不透明な時代にあって、我々の生き方を考える上で植物に学ぶべきことが多いと実感させられました。

私の編集による会報の発行は今回で最後になります。つたない編集者でありましたが、お付き合いいただきありがとうございました。また、お忙しい中、原稿の執筆を快くお引き受けいただけました諸先生、会員の皆様に深くお礼を申し上げます。次号からは新役員により、一層充実した紙面作りがなされると思います。どうぞ、ご期待下さい。それでは、皆様のご健康と今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。　（野地　裕美　8期卒）